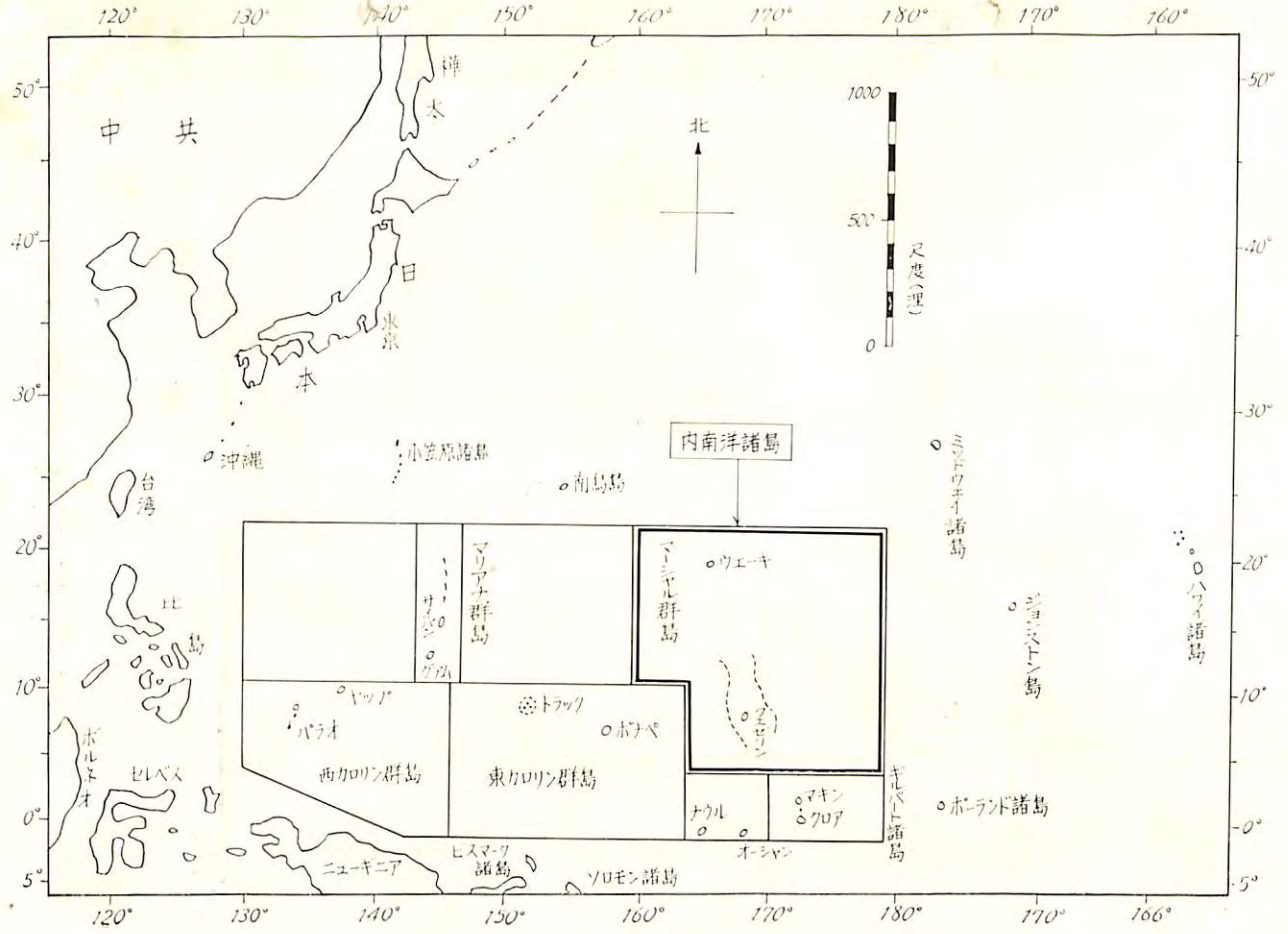


クエゼリン島の今と昔

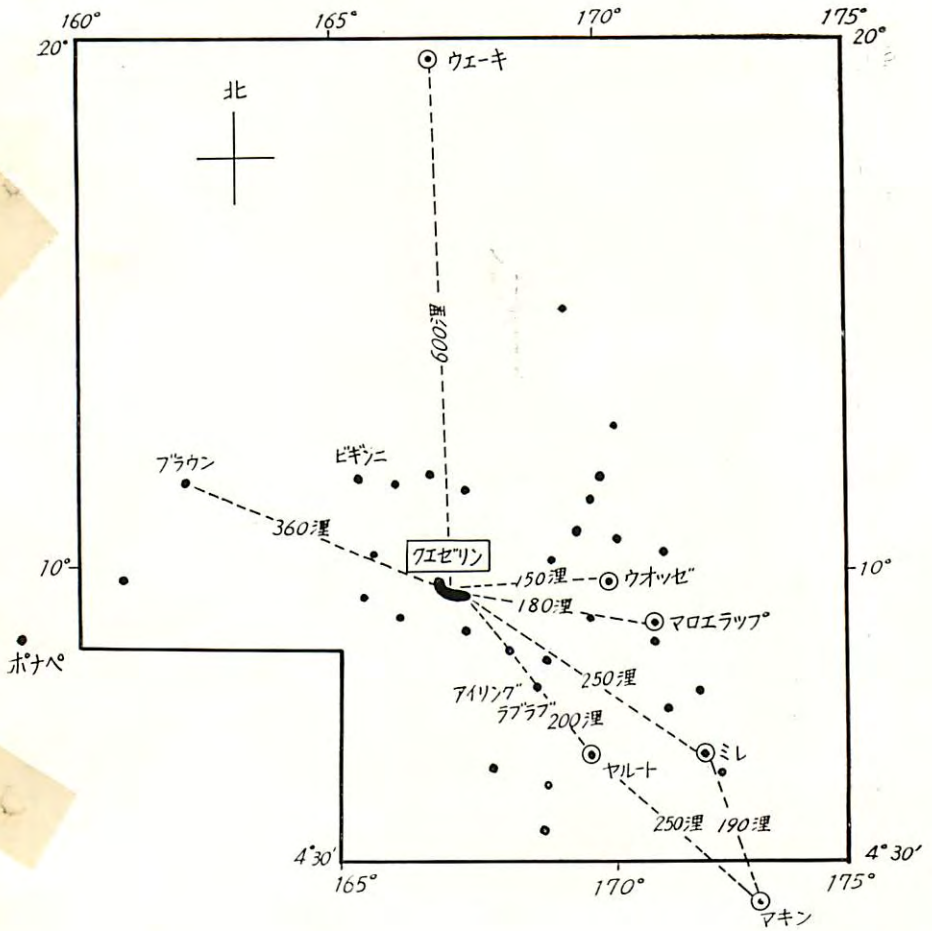
——南海に眠る殉国の英霊に捧ぐ——

クエゼリン島戦没者遺族会

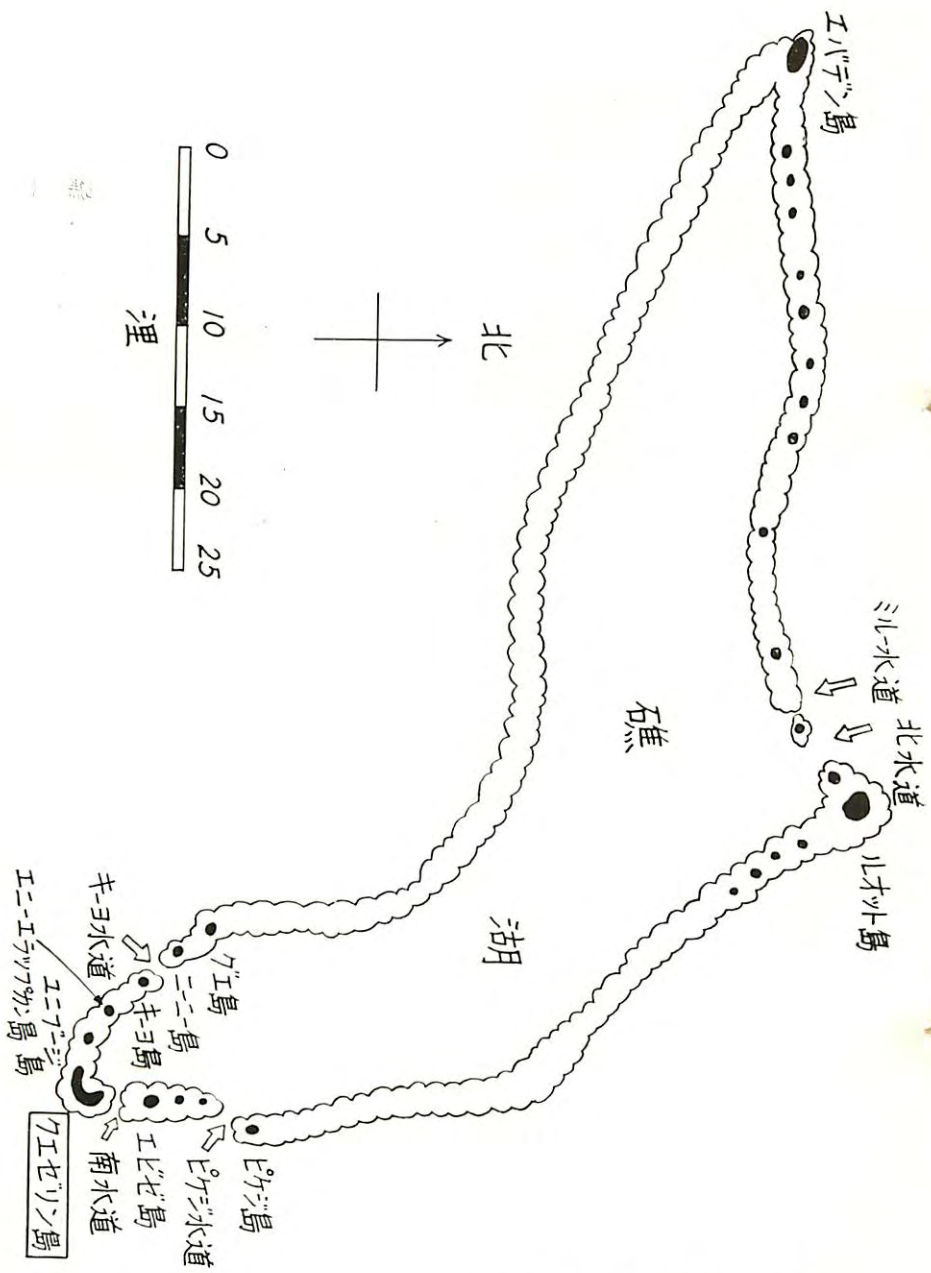
内南洋諸島要図



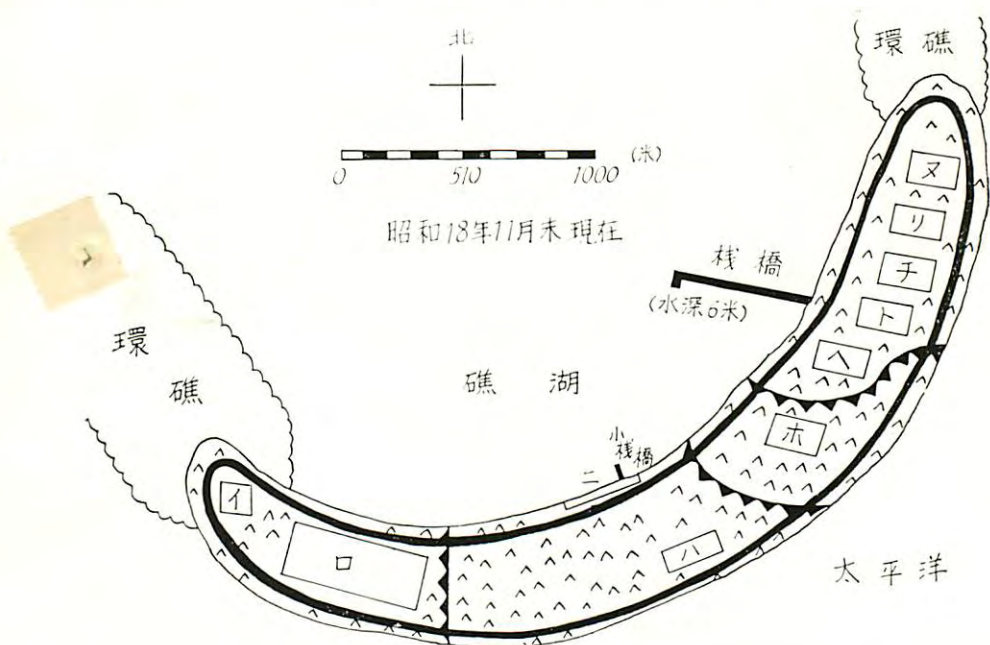
マーシャル群島要図



クエゼリン環礁



クエゼリン島要図



イ	捕虜処刑地	ハ	第6通信隊
口	飛行場 (滑走路)	ト	第6根據地隊司令部
ハ	原住民住宅	チ	第61警備隊
ニ	施設隊	リ	第6潜水艦基地隊
ホ	クエゼリン神社	又	陸軍部隊

△△ --- やしの密林を示す
 — — — 一間道路を示す

▲ --- 防壁線を示す



クェゼリン神社と海軍陸戦隊（昭和18年4月）



クェゼリン島日本人墓地（昭和38年8月）



クェゼリン島の激戦（其の一）



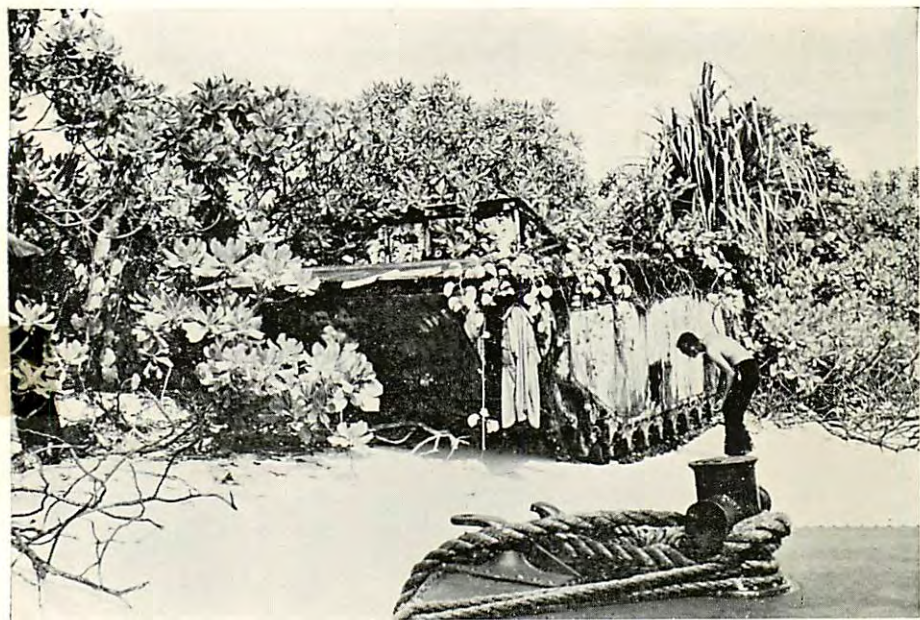
クェゼリン島の激戦（其の二）



トーチカと機関銃の残がい (クエゼリン環礁)



船の残がい (クエゼリン環礁)



水陸両用戦車の残がい（クエゼリン環礁）



クエゼリン本島米軍の家で働く島の女

序

私達は、かつての大東亜戦争中、昭和十九年二月、内南洋マーシャル群島のクエゼリン島で全員玉碎いたしました守備隊員の遺族であります。

終戦後、この遺族のうち少数が毎年二月六日に靖国神社に参拝し、英霊をお慰めしておりますうちに、クエゼリン島戦没者遺族会が育ってまいりました。

昨年二月六日も例年のように靖国神社に集りましたとき、誰いうとなしに本年は玉碎後二十年になるから、われわれ遺族ができるだけ多数集って靖国神社で心のこもった二十年祭を営みたいものだという熱心な希望がもたせられました。

そこで、厚生省援護局にお尋ねしたところ、ご親切な助言と御協力を戴き、数回にわたる準備会を開催いたしました。具体的な行事の構想を定めた次第であります。

この行事のうちで、クエゼリン島戦記（仮称）を刊行することとし、着々準備中のところ、林幸市氏（元第六根拠地隊参謀玉碎二ヶ月前まで約一年八ヶ月クエゼリン島勤務）、松平永芳氏（現防衛庁陸上幕僚監部勤務防衛庁戦史室勤務中、クエゼリン島防衛戦をとくに研究調査された方）、長谷川敏氏（アジア航空測量株式会社に勤務し最近クエゼリン島より帰国された方）の絶大なる御協力によりまして、本書を完成することができました。

御承知のように、クエゼリン島は、かつて日本の統治下にあった内南洋諸島のさいはての島でありまして、多数の方がこの方面の状況を御存じないと思はれますので、本書が御遺族の皆様にご慰めとなれば、まことに幸と考えております。ここに本書刊行にあたり一言申し上げます。

昭和三十九年二月五日

クエゼリン島戦没者遺族会

会 長 林 茂 清

目次

序……………クエゼリン島戦没者遺族会々長 林 茂 清

ありし日のクエゼリン……………林 幸 市……………一

マーシャル群島……………一

クエゼリン環礁……………二

原住民の生活……………三

日本統治……………五

軍艦常磐の巡航……………六

マーシャル方面防備部隊……………一

クエゼリン島の初空襲……………三

隊員の生活……………四

慰問団の来島……………七

ミッドウェイ海戦の前後……………一六

米海兵隊捕虜処刑……………二〇

陸軍部隊の増強と主要島の築城……………三三

南洋部隊の防衛作戦会議と玉碎戦準備……………四四

クエゼリン島の防衛戦……………松平永芳……………元

マーシャル方面の一般戦況……………元

クエゼリン島の激戦……………三三

最近のクエゼリン島……………長谷川敏……………三〇

旧内南洋諸島の現状……………三〇

(一)太平洋信託統治地域 (二)マリアナ群島

(三)マーシャル群島 (四)カロリン群島

最近のクエゼリン環礁……………三〇

(一)米軍の基地 (二)戦火の跡……………三〇

ありし日のクエゼリン

林 幸 市

マーシャル群島

米国のモリソン博士の書いた太平洋戦争の戦史には、つぎのように述べてある。

「南洋群島は、世界経済からみるとるに足らぬが、第二次世界大戦の戦略上には重要な地域であった。ギルバート、マーシャル、カロリンおよびマリアナ諸島は、米國、比國、支那および日本を結ぶ航路を横断し、あたかも巨大な熱帯蜘蛛が巣を張っているようにみえる。マーシャル群島のクエゼリン、カロリン群島のトラック、マリアナ群島のサイパンは、それぞれ防禦組織の中心をなし、日本から容易に支援補給がうけられ、航空および海軍兵力の集中展開ができ、飛行機および艦船の修理ができる。

現有連合國基地からでは、いかなる偵察機でもこれらの島にとどくことができない。もっとも近距離にあるマーシャル群島でさえ、ガダルカナルから一、一〇〇哩、カントンから一、一三〇哩、ジョンストンから一、二三〇哩の地点にある」

この所説のように、日本海軍としては、米軍の太平洋渡洋作戦に備えて、これらの島は戦略的要衝であつ

た。とくにマーシャル群島、ギルバート諸島は、内南洋群島の最東端に位し、対米第一線のきはめて重要な防禦線であった。

東京湾口より南東方約二、五〇〇哩（速力一〇節の船では約十日間かかる）、そこに礁湖を包んだ環礁があり、その上高き一、五米程度の低いやしの島が、あたかも広い庭の敷石のようにつきつぎに浮んでみえてくる。この島はやしが密生しているので、遠くからは島よりもさきにやしが点線をひいたような情況で発見される。

ここでさんご礁について簡単に説明しておこう。温暖な海中にすんでいるさんご虫の石灰質骨格からできた岩礁であるが、一般に表面がガサガサしているのは、はだしでこの上を通るとけがをすることが多い。

さんご礁は、一般に祐礁、保礁、環礁の三種類に区分されておる。このうちマーシャル方面の環礁というのは、陸地からまったたく独立した海中のさんご礁脈でできており、環状または不規則な円状に発達してきたもので、この環礁の中には礁湖があり、礁湖と外海を通ずる狭い水道がある。

マーシャル群島は同じ内南洋諸島でも、高い山の多いサイパン、パラオ、トラックの島などは、あまりにもその状況が変わっているので、はじめて見る人には珍らしくかつ神秘的とさえ感ずるであらう。

クエゼリン環礁

クエゼリン環礁は、マーシャル群島でも最大のもので、この群島のほぼ中央にある。この環礁には約九〇個の

大小の島が点々と浮んでいて、その中に長さ約六〇哩、最大幅約十五哩という世界最大の広さをもつ礁湖がある。

クエゼリン島は、この環礁の南端にあつて、この環礁でも最大の島で、長さ約四軒、最大幅六〇〇米、やし樹の高さ二六米という小さい島である。九五二航空隊がいたエビゼ島は、クエゼリン島の北東方約四軒のところにあつて細長い島であつた。

外海からクエゼリン島への水路は、キーヨ水道、南水道、ピゲジ水道の三個所であつた。礁湖内は广大で、水深が大体三〇米から五五米であつたから好適の錨地であつた。しかしこの礁湖内には浅礁が点々とあつて、昼間の礁湖内の交通はなんとかできたが、夜間はまったく動けなかつた。南洋の海は清く澄みきっているので、この礁湖内では海底がはっきりみえていた。

原住民の生活

昭和十七年南洋庁の調査では、クエゼリン環礁の島々には、五一四名のカナカと呼ばれる原住民が住んでおつた。この原住民は主としてやしを食料とし、雨露をしのぐに足る程度のやしの葉で屋根をふいた簡易な家屋で生活をしてきた。日本の統治時代となつてからは文化もややすすみ、服装も漸次整つてきて女性は日本の単服のようなものを着ていた。しかし男性は相変わらず半裸体が多くまた男女ともはだしであつた。

「私のラバさん酋長の娘」の歌で有名な南洋特有の踊がかれらの唯一の慰安のようであった。

カナカ族は、一般に皮膚が暗かつ色で、頭髮は大体黒いが一部ちぢれているものもあった。性質は温順、快活であるが、酒を飲むと狂暴性がでるといので南洋庁の達示で一切アルコール類は原住民に与えてはいけないことになっていた。

自然の天恵によって、衣食住が一応できているので、怠けものが多く労働することはとくにいやがった。戦時中クエゼリン島では三〇名近くの原住民がいたが、洗たくやその他の雑役に使用しておった。

原住民の生活が以上のようにであつたから、神経を使う必要もなく一般に長命であるともいはれていた。非常に目立ったのは、女性の壮年期がきはめて短く、日本の女性で三〇歳前後でみられるような水々しい容色のものがまったく見られなかつたことである。これは熱帯地の特色として、男女共早熟であり、女は十四歳で結婚するというのをきいて当然かもしれないと思つた。

夫婦間の愛情は濃かで、中には熱烈な恋で結ばれたものがあるときかされた。このように外人の想像するような半獸的なものではないようにみうけられた。

平和な時代には、若い男女が月光の西海岸で恋をささやいている場面を見たことがあり、またカヌーに乗ってギターを弾いて楽しむ男女のラブシーンを見たこともある。トラツク環礁の秋島で大酋長の娘が、軍艦常磐の若い士官に憧がれていた。翌年再びこの島を訪れた時、この若い士官が必ず上陸するものと千秋の思いで待っていたらしかつた。しかしこの士官がすでに転勤していないことがわかつてがっかりしていた。こうした大酋長の娘の悲恋を当時私はつぎのように記していた。

可愛い眸を吾等に向けて、走り来りて吾を迎えぬ、君待つ人の姿は見えず、秋島乙女は寂しく笑う。酋長は原住民に対し非常な権力をもっていて、クエゼリン方面では、クエゼリン環礁の南方にあるアイリングラブラブという環礁の島に住んでいた。そして戦時中でも時々クエゼリン島の第六根拠地隊司令部を訪れ、珍しい貝類や鯨節などの土産をもって挨拶にきたことを記憶している。

日本の統治

一七八八年囚人をのせて、濠州に回航中だった英国船長マーシャルが、このマーシャル群島の東端の一つの島を発見して、自分の名を与えたのが今日そのまま残っているとのことである。その後一八八八年独逸はマーシャル群島を、英国はギルバート諸島をそれぞれ領有することとなった。

一九二〇（大正九）年、第一次世界大戦後ベルサイユ条約によって、マーシャル群島は内南洋諸島とともに日本の委任統治区域となった。東経一三〇度から一七五度まで、北緯〇度から二二度までの広大な海域に点在する島々を南洋群島と呼称して、この全般を統治する南洋庁をパラオ本島においた。なお支庁をヤップ島、サイパン島、トラック環礁の夏島、ポナペ島、そしてマーシャル群島ではヤルト島にそれぞれ設けて行政管区がきまっていた。

その後一九四五（昭和二〇）年終戦まで、二五年間この統治が続いたのであるが、その実績は前統治国であっ

たスペイン、独逸の場合にくらべて、きはめて良好であったとのことである。この司政が原住民に好感がもたれた原因は、原住民の風俗習慣をよく理解し、また尊重して指導したことにある。

とくに南洋庁がこの司政で留意したのは、産業開発と教育であった。産業としては、ボーキサイド、ポブラ、鯉節、その他この地方特有の貝その他工芸品があったが、この産業の開発によって日本人の移住がさかんとなり、支庁の所在地ばかりでなく小さい島にいたるまで日本人が住んでおった。

支庁のある島では、日本人の店舗があつて日本の品物とくに日用品、衣類など贅沢品は別として大体生活に必要なものが準備されておつた。その他郵便局もあつたし、まづ困ることはなかった。

教育については、移住した日本人のために小学校があり、原住民のために公学校が各地にあつた。そして日本語の普及に努力したので原住民の子弟はほとんど日本語ができるまでになつておつた。またこの子弟の中で優秀なものは日本に留学させる制度があつたし、さらに優秀なものは公学校の先生となつていた。

なお、各群島で有力な酋長には、交互に日本内地を見学させ、日本の状況を認識させるよう努力をしたのである。こうした南洋庁の司政によつて、原住民はまことに平和な生活をしておつたのである。

軍艦常磐の巡航

日米両国の風雲が急を告げる昭和十五年となつて、日本海軍は、はじめて南洋群島の防備を重視し、この方面

に第四艦隊が常置されることとなった。

この艦隊は潜水艦、航空機を含む各種艦艇で編成されておいて、南洋方面の防備を促進するために、現地で猛訓練を実施しておいた。

と同時に各専門分野に応じて、各戦略地点の研究調査を急いでおこなって着々と作戦資料を整備しておいた。

もともと国際連盟規約および委任統治条項によって、日本としては南洋方面に軍事基地を建設したり、砲台を築いたり、島民に軍事訓練をほどこすことなどはゆるこれらの島を軍事的に使用することは禁止されていた。

そこで昭和十五年頃は、わずかにサイパン、パラオ、トラックの島に通信施設ならびに燃料補給基地が準備されていた程度であった。

防備施設を本格的に準備しはじめたのは、昭和十六年の初旬であって、その第一に着手したのは、マーシャル方面の航空基地と防備施設の整備であった。

軍艦常磐は、第四艦隊でもただ一隻の機雷敷設艦であって、この機雷敷設訓練のほかに特殊な任務が与えられていた。そのために艦隊とともに行動する機会ほとんどなく、単独で南洋の主要島を巡航することができた。この巡航によって、主要島的情況を知ることができかつ原住民と親しく接する機会も多かった。

パラオ本島のガラスマオというところで、軍艦常磐の幹部が、酋長以下原住民より南洋特有の踊で歓迎をうけたことがあった。仏桑花が紅白咲き乱れている小学校の校庭であった。三〇名に近い原住民の男女が手足を動かし腰をふり乱舞しはじめる。次第に興奮してくるに従って香の高い香水を踊っている人達にふりまく。この香水

でなお刺戟されていよいよ踊は佳境に入り、その熱狂振りにはまったく驚いてしまった。遠く家族を離れて、ややもすれば郷愁を感じている一同には、この南海の僻地でこのような歓迎をうけようとは夢のようであったであろう。一同すべてを忘れてこの歓迎に感謝しつつ拍手を送った。

昭和十五年も年末となると、日本海軍恒例の定期異動があった。この時艦長以下幹部の大部分が交代したが、私だけはそのまま残留することとなり、前年に引き続いて南洋の主要島を再び巡航することとなった。しかし昭和十五年度のような特殊な任務もなかったので楽であった。

一般に軍艦内の生活といえば、海に浮ぶ鉄材のワクの中で、男ばかりの集団生活であるために無味乾燥であった。しかも南洋行動ではその感が強かった。もともと艦艇の乗員が一番喜びまた楽しいものは、鉄材のワクから解放されて上陸することである。ところがマーシャル方面の巡航では、やしの繁った島だけで、しかも太陽の直射をうける暑さも加って、よほど珍しいものがない限りその楽しさは半減する。このような感じもあって、この方面で折角上陸させて慰めようと考へてもその希望者は非常に少なかった。上陸しても浜辺で貝類を拾って帰るのが関の山であったからである。

そこで昭和十六年の巡航では、乗員の士気をあげるために、艦内で充分慰安ができる方法を研究し、まづ艦内新聞を刊行すること、つぎにハーモニカ、アコーディオン、尺八など、手持ちの楽器をもってバンドを組織すること、また艦内にレコードを放送すること、なお映写機を準備した。幸に幹部および乗員の中に適当な特技者がおったのでこの人達の非常な活躍によって、軍艦常磐の南洋巡航はまことに快適であったし、病人も非常に少なかった。

一日の猛訓練を終って環礁内に碇泊するとやがて夜を迎える。南十字星が夜空に輝きはじめ、黒い影のやしの島が浮き出した頃、広い軍艦常磐の後甲板では、夜風に涼をとりながら六〇〇名の乗員が懐しいメロディにうっとりとしている。こうして乗員は、一日の労苦を忘れ、明日の訓練に備えることができた。

映画も好評だったが、艦内新聞は中々好評であった。和歌、俳句、散文、論説等乗員の自由な投稿を歓迎したので、趣味のあるものももちろん、一般乗員にとっても楽しいものとなっていた。クエゼリン島を偲ぶものとしてその一部を紹介しよう。

○やし茂る島に憩いしわが艦の

楫エドななめに南十字星見ゆ

○みんなみの洋の入り日は美しき

燃ゆる朱の雲むらさきの波

○亭々と島やしの樹の葉末ごし

悠々と白雲の行く

○島　散　　歩

一、名こそ知らねど木の実を食ひ

言葉通ぜず手ぶりで話し

南洋乙女と語らえば

友ぞそばにてただ笑う

朗らか勇士の島散歩

二、神祕の海に珍魚住み

島のやしの樹繁茂する

常夏の島夢の国

南洋乙女のえくぼぞいと

朗らか勇士の島散歩

三、言葉通ぜず素振りで話し

しばしの間語り合いに

乙女と勇士の心はとけて

とけて結んだ心をといて

朗らか勇士の島散歩

昭和十六年九月初旬、私は横須賀防備隊に転勤命令をうけ、こうした約一年四箇月の軍艦常磐での南洋巡航に
終止符をうち、数々の懐しい思い出を残して、トラック環礁にいざさらばした。

マーシャル方面防備部隊

前述のように、南洋群島は軍事的使用の制限をうけていたので、本格的にマーシャル方面の防備施設をはじめたのは、昭和十六年の初旬であった。しかし現地の調査研究はすでに昭和十四年、昭和十五年の二回に亘って詳細実施されていたので、艦船、部隊のこの方面への進駐は比較的順調におこなはれた。

マーシャル方面の防備は、第六根拠地隊が担当し、まづ司令部をヤルト島におき、部隊（第六防備隊）はウオッセ島に主力をおき、ミレ、マロエラップ、クエゼリン、ルオット等に見張所を設置した。

いよいよ太平洋戦争がはじまる直前には、この方面の部隊、艦船は急速に増強されて、防備態勢は一応完成しておいた。開戦早々英国領のギルバート諸島（十二月九日）を、米国領ウエーキ島（十二月二十三日）をそれぞれ占領したので、マーシャル方面防備部隊の防備担任区域は、北はウエーキ島より南はギルバート諸島にいたるまで、南北約一、〇〇〇哩、東西約八〇〇哩の広大な海域となった。

この海域には約八〇〇の多くの島が点在していたが、このうち比較的大きくまた重要地点であったウエーキ島（六十五警備隊）、ウオッセ島（六十四警備隊）、マロエラップ島（六十三警備隊）、ヤルト島（六十二警備隊）、クエゼリン島（六十一警備隊）には約三、〇〇〇名の警備隊主力が守備し、司令部はクエゼリン島にあった。なお小さい島でも原爆実験地で有名なピキンニ島をはじめ、比較的重要な島には特設見張所を設置して数名の見張

員を派遣しておった。

海上部隊としては、約六〇隻の砲艦、駆潜艇、掃海艇、特設監視艇、徴備舟艇、魚雷艇が各警備隊所在地に配備されていたが、魚雷艇以外は全部徴備の船舶であり、また漁船であったからまことに老朽のものが多かった。ただ魚雷艇は当時日本海軍最新鋭のもので、三隻はウエーキ島に三隻はウオッゼ島にあって哨戒任務に従事しておった。

航空部隊は、第四艦隊長官の作戦指揮にあつた航空戦隊がクエゼリン環礁のルオット島に司令部をおき、ウエーキ、ウオッゼ、マロエラップ、ミレに航空隊を分派して遠距離の索敵、哨戒、攻撃に従事しておった。

水上機部隊は、第六根拠地隊司令官指揮下の九五二航空隊がエビゼ島にあって、水偵で比較的近距离の哨戒に従事しておった。通信部隊は第六通信隊がクエゼリン島にあって、主として敵の動静に対する情報連絡に従事しておった。なおクエゼリン島には、第六潜水艦基地隊があつて、相当の宿泊、慰安施設があつたが、この島に入港する潜水艦乗員はほとんどこれを利用しなかつた。従つてこの隊の任務は潜水艦への補給が主であつて、これには非常に活躍しておつた。このほかクエゼリン島には朝鮮人の多い施設隊があつた。

こうした兵力配備によつて、マーシャル方面防備部隊は防空、対潜水艦、対水上艦艇の哨戒見張に従事しておつたのであるが、当方面が対米第一線のまもりであるだけに、いはば神経戦の連続であつたといつても過言ではない。

クエゼリン島の初空襲

昭和十七年二月一日であった。米空母機動部隊がマーシャル方面の主要基地に早朝奇襲爆撃をおこなった。この大空襲によって各基地とも相当の被害があったが、クエゼリン島では第六根拠地隊司令部庁舎に爆弾が命中して、司令官八代海軍少将首席参謀法元海軍中佐が同時に戦死した。八代司令官の後任には阿部海軍少将が、法元参謀のあとには私がそれぞれ至急クエゼリン島に赴任するよう命令をうけた。私は南洋方面に経験があったし、何かしらこの度の赴任には宿命的なものを感じながら勇躍出発した。

いよいよクエゼリン島に着任してみると、司令官、首席参謀を同時に失ったこの司令部の寂しさがひしひしと感ぜられ、あたかも一家の両親が同時になくなったような情景であった。

次席参謀木下海軍少佐が私達の着任によって心から喜びかつ安心した。しかし木下参謀はきはめて沈着冷静にこの大空襲による被害の復旧その他の情況報告など、テキパキと処理していたのには感銘した。その後この大空襲による貴重な戦訓によって、この方面の防衛対策を真剣に検討して遂次改善することにした。

隊員の生活

マーシャル方面の地理的特性によって、食物、衛生その他が南洋群島の中でも最悪の条件下にあったので守備隊員の物心両面の苦勞はまことにみなみならぬものがあつた。

暑さは日本の七月頃と思えばまづ間違いない。ところがこれが一年中続き、しかも昼夜の変化が少いので、夜暑さのため眠れず真夜中に飛び出して浜辺で涼んだことがあつた。

ただ有難いことには、大体毎日一回スコールが来襲して一時的でも暑さを緩和してくれることである、それと他の熱帯地方のようにマラリヤはまったくなかつたし、毒蛇もいなかったので比較的安易な生活ができた。

大洋に包まれた小島であるだけに非常に湿度が高く、棄煙草の火がすぐ消えるほど島内がジメジメしている。神経痛で困っている人だつたら一日でも耐えられないであらう。南洋ボケとよくいはれるほど神経系統の作動がまことにぶくなり、身体がだるく頭がぼんやりすることが度々あつた。

サイパンやトツラクのように、バナナ、パイヤその他の南洋特有の果実はなく、ただやしが生育しているだけであるから楽しみも少い。飲料水は雨水を貯えてこれを消毒して使用しているのでお茶の風味はまったくない。

井戸を掘ってみるとすぐ塩分の多い水がでて、飲料水には不適であつた。湿気のために煙草は完全にカビがで

ているし、酒は暑いので防腐剤が混入してあった。キャラメルや菓子類は暑さのため全部軟くなっていた。

これでは、いかなる愛煙家、甘党、カラ党でもその味力がないかというところではなく、そこは郷に入ったら郷に従えて、結構に喜んでこれらの嗜好品を愛用し、またこの方面ではこれが唯一の慰安であった。この点では相当地のストックをもっていたので安心してあった。熱病では、この方面特有の Dengue 熱と呼ばれるものがあつた。まづこの地方で三泊すると必らずこの熱病にかかることになっていった。この熱病は、蚊の媒介によってかかるといはれていたが幸なことには免疫性があるので、一度かかっておけばあとは心配はなかつた。

ただこの高熱のために余病が出るのが心配なので静かに休んでいる以外に方法がない。

私もクゼリン島に着任して三日目にこの病氣にかかつて、三十九度位の高熱が一週間続き、蚊帳の中で汗を出しフウフウいいながら静かに寝ていなければならなかつたのはまったく弱ってしまった。

蠅の多いことも有名でまったく弱つた。島の周囲に流れてくる腐つた木材や、やしの殻などが海岸に散在して、蠅の生育するのに好都合であつたらしい。島の消毒に関しては相當に留意していたのであるが、中々これを撲滅することは困難であつた。

また雨水を使用する関係と蠅の多いために、アミーバ赤痢にかかることがあつた。野菜は多少栽培していたが到底隊員全部の食料にはならなかつた。クゼリン島では豚の飼育をしていたが一匹が病氣になつたら半年近くで全部死んでしまつた。

結局隊員の食料としては、日本内地より送つてもらふ米と罐詰にたよるほかはなかつた。

まれに近海でとつた魚類やカニを珍重がつたことはあるが、魚類は日本内地のものに比べて水くさく、とくに

毒物をもったものがあるので非常に警戒しておった。もしこのような毒物の魚類を食べると全身がすぐしびれてしまう。軍艦常磐の乗員でこのようなことがあって大騒ぎをしたことがある。

大体暑いので食欲が減退し、何を食べてもおいしいと感じたことはなかった。従って自分のベースによって保健を考えていくほかはなかった。やしの汁が非常に滋養があったので、毎朝一個分飲むことにしていたが、一週間ほど経過するといやな体臭が発散するのですぐやめてしまった。

厚生施設としてはラデオ、碁、将棋、ピンポン、庭球など要具は一応整備しておったが、見張哨戒に交代して勤務し、寸暇を利用して兵器の整備、諸訓練に従事していたので、休養時間も少かった。とくにこの方面は夜がきりめて短く、朝が早いので、できるだけ睡眠を多くとるように留意した。これがために昼寝を励行しておった。このように娯楽の時間が少かったので、自分の趣味に応じて慰安をもとめる以外はなく、大部分は読書をしていった。平穩な情況でも、少しの油断もできないので、団体でおこなう運動会や慰安会は中々実施する機会はなかったが、外警戒を厳にしつつ情況の許す限り、隊員の士気を向上するためにこっそり演芸会をおこなって楽しんだこともある。

こうした生活の中で、隊員を喜ばしたものは、何といっても日本内地より直接この島に入港する輸送船の姿を見た時であった。まづ郵便物が各員に渡されると思い思いのやしの樹影で楽しそうに読んでいた。この時郵便物のこなかったものの寂しさはまた格別であった。

そのつぎは慰問袋の配給であった。ところが北方の戦場宛の慰問袋がこの南方海域に送られて、その通信文の内容を見て大笑ひをしたことがあった。この慰問袋の中の品物で、もつとも一同に喜ばれたものは古雑誌であっ

た。また同じ古雑誌でも講談倶楽部とか一般大衆向けの雑誌が愛読された。現在のような週刊雑誌がその頃あったら随分歓迎されたであろう。この輸送船の入港は、故国よりの代表的使者として、隊員一同が慰められ、また故国への郷愁と感謝合掌の下に歓迎されておった。

慰問団の来島

昭和十七年の暮であつた。第四艦隊司令部より慰問団をマーシャル方面に派遣される連絡があつた。私は用件でトラックに出張している時であつたので、案内役を兼ね輸送機で慰問団と共にクエゼリン島に歸つた。

この慰問団は男七名、女三名、計十名であつたが、日本内地よりトラック環礁に向う途中、乗船していた輸送船が米國潜水艦の攻撃をうけて沈没し、この慰問団は九死に一生を得て救助されたとのことである。しかし完全に丸裸となつてしまつたので、トラックで隊員の作業服を借用し、必要な楽器その他の要具はトラック在住の日本人から借りてきたものであつた。私はこの情況をきいて、その上対米第一線の南海の果てまで慰問しようといふ心意氣に感激した。また隊員一同もこの慰問団の来島に心から感謝し、双手をあげて歓迎した。

マーシャル、ギルバート方面の防備地域には、日本の婦人はまったくいなかったもので、いよいよこの輸送機が九五二航空隊に到着すると、隊員一同の視線は三名の女性に集中されていた。久し振りに見る日本女性の姿が懐しかったのであろう。そして故国の空にいろいろの思ひをよせたことであらう。

第一回の慰問演芸はクエゼリン島でおこなった。外警戒は常時嚴重にしなければならぬので、隊員の半数宛交代で楽しんだ。この慰問団は少しの疲労もみせず熱演によって隊員一同を笑はせまた喜ばしてくれたので、久し振りに何ものも忘れたかのようにであった。この慰問団の来島は、隊員の士気を振作するのに何ものにもかえ難い効果があったと思った。

この慰問団は、マーシャル、ギルバート方面の主要島を慰問することとなり、北はウェーキ島より南はギルバート諸島のタロア島まで、各地で大歓迎をうけ、長期間旅の疲労もなく無事トラックに到着したこと知って、隊員一同を代表して感謝の礼状を送ったことを記憶している。

この慰問団の来島で、一番苦勞したのは女性三名の宿泊施設とその警戒であった。久し振りに見る日本女性に對し、また非常な苦難を乗り越えてこの避地に到着した人達に、もしも問題が起つては申し訳ないという老婆心からであった。しかし対米第一線の隊員にはそんな不心得ものが一名もいなかったことは、今日において私達の誇りとしている。

ミッドウエイ海戦の前後

ミッドウエイ海戦は昭和十七年六月四日におこなわれたが、その一カ月前には第六艦隊（潜水艦艦隊）の旗艦香取以下多数の潜水艦がクエゼリン環礁内に碇泊し、ミッドウエイ海戦に備えて待機しておった。なお潜水艦以

外でも特務艦艇が集合していたので、クエゼリン環礁内はまことに賑かであった。

いよいよミッドウェイ海戦がはじまると、通信情報で日本海軍に関する悲報が刻々に伝わり、敗戦の様相が判明してきた。開戦当時の真珠湾攻撃の場合とはまったく正反対に、隊員一同ががっかりし心配しておった。

この海戦によって、米軍は積極的に太平洋方面の進出を考えたらしく、まづ米潜水艦がマーシャルおよびギルバート方面に活潑に出没してきた。そしてこの方面に行動する輸送船の被害が急増加してきた。

日本の連合艦隊としてはこの海戦を転機として最早や積極的に進出する作戦ができなくなり、マーシャル群島を決戦線として、激撃するいはゆる守勢作戦をおこなうほかはなかった。

もともと日本海軍の研究では、どんな場合でも米軍の太平洋進攻としては、まづハワイを基点として、北部マーシャル群島からリアナ群島（サイパン）への北方路と、中部マーシャル群島からカロリン群島（トラック）への中央路、そして南部マーシャル群島またはギルバート諸島から比島南部への南方路の三つの進撃路が考えられていた。

そしてこのいずれかの進撃路の主要島を攻略しつつ飛び石作戦を実施するであろうと予想されていた。これがためにマーシャル群島とギルバート諸島は、いずれにしても米軍の最初に攻略する予想地点であることも大體想像しておった。それだけに、このミッドウェイ海戦の敗戦は、マーシャル方面防備部隊として他のいかなる部隊よりも一番深刻な情況を予想しなければならなかったし、いふなればいよいよ来るものが来たな——という宿命的な感しで任務の重大さを痛感した。

昭和十七年八月十七日未明であった。米潜水艦二隻がギルバート諸島のマキン島に近づき、乗艦していた海兵

隊約一〇〇名がゴム浮舟で同島に奇襲上陸した。この島の守備隊員八〇名は、ヤルートの第六十二警備隊より派遣していた陸戦隊であったが、これと応戦したがついに隊長以下全員玉砕して、この島は米軍に占領されてしまった。

この報に接したマーシャル方面防備部隊は、早速各主要島より派遣した兵力をもって陸戦隊を編成した。さしあたり航空戦隊の中攻によって爆撃をおこない、同時に先発隊を輸送機で送り第一次奪回戦をおこなったところ、米軍はその夜待機していた潜水艦で逃げてしまった。こうしてこの奪回戦は無血占領することができた。この時マキン島を掃蕩中、潜水艦に逃げおくれた米兵九名が原住民の家にかくれているのを発見して捕虜とした。

米海兵隊捕虜処刑

米海兵隊捕虜九名は、その後クエゼリン島に連行して第六十一警備隊庁舎の一隅で保護しておいた。昭和十七年十月頃となると、戦局はわが方にますます不利となり、マーシャル方面では、米軍の大進攻に備えてまことに緊張している時であった。

第六根拠地隊司令官阿部海軍少将は、この最悪の事態に備えて、米海兵隊捕虜九名の処置をできるだけ早く決定したいと考えていた。

そこで司令部としてつぎのよう案画した。第一案は、第四艦隊防備担任区域で比較的 안전한ところに転送す

ること。第二案は、日本内地へ送還すること。第三案は、現地で適当な方法で処刑することであった。

この処理要領は、その後大本営および第四艦隊司令部に連絡されその指示を仰いだのであるが何ら回答もなかった。再び至急回答を要求したが相変らず連絡がなかった。

当時はガダルカナル方面の失陥直後のことであり、ソロモン、ニューギニアの戦局もいよいよ日本軍が窮地に追いこまれた頃であったので、大本営や第四艦隊司令部として捕虜問題どころの騒ぎではなかったかも知れない。

しかし当方面としては、捕虜の処理はきはめて緊急を要する問題と考えていたからである。その後大本営海軍部部員が来島したので、早速この問題について協議したところ同部員はつぎのように述べた。

第一案については、輸送がまづ困難であるし、また米軍大進攻の地域については目下のところ予測がつかないので、いずれの地域に転送しても五〇歩、一〇〇歩で大差はない。第二案については、遠隔の地からの輸送は、現戦況下では不可能であろう。したがって第三案によって、現地で最も適当と考える方法で処分するほかはない。これが現在として大本営の考えていることである。

そこで阿部司令官も現地処分を決心し、これに関する計画をつくりつぎのように実施した。

昭和十七年十月十六日午前九時であった。クエゼリン島西端の広場を処刑場と定め、捕虜九名は両手を後にしばられ目かくしの上トラックで運搬されてきた。マーシャル方面防備部隊隊員の中から、かつて上海特別陸戦隊勇士であり、剣道の達人五名を選抜して、つぎつぎに日本の古式に従って日本刀で処刑した。死体は後方の穴に埋め土葬とし、その上には南洋の名もしらぬ花を捧げることにした。

戦争のもつ運命とはいいながら、こうして南海の僻地で最後をとげた米海兵隊も敵ながらやはり人間である。人類愛を感じながら一方やがては今後予想される米軍大進攻によって、私達の運命もかくあるのであらうと痛感したのである。ともあれ捕虜処刑という今まで当司令部の頭痛の種であった懸案事項も解決して、心おきなく敢斗できる情況となった。

終戦後この捕虜処分が問題となり、昭和二十一年五月十五日グアム島で米国海軍の軍事裁判がおこなわれ、私もグアム島に連行された。この裁判の結果、阿部司令官は絞首刑、処刑場の指揮官であった小原海軍大佐は十年の刑、捕虜を処刑場まで運搬した指揮官内木海軍少佐は五年の刑となつて、当時首席参謀として当然処刑さるべき私がこうして奇しき運命の下に生きのびている。この私がどうしてこうなつたのかまったく不思議としか思えない。

処刑当時、阿部司令官以下関係した幹部には、この問題がまさか重大な運命を左右することにならうとは、誰も予測した人はあるまい。唯運命の神だけが知っていたことであらう。

陸軍部隊の増強と主要島の築城

昭和十七年末であつた。ウェーキ島に陸軍大佐を指揮官とする約五〇〇名の陸軍部隊が増強されたが、マーンナル方面としては陸軍部隊派遣の最初であつた。その後昭和十八年六月には、比島方面から陸軍部隊歩兵一個連

隊がクエゼリン島に到着した。この増強については、約一カ月前から判明していたので、宿舎の施設、食料の準備、防衛分担その他万般の準備を備えてこの部隊を歓迎した。この部隊が派遣される頃は、米潜水艦の横行時代であつて、無事来島を祈っていたのであるが、駆逐艦二隻に分乗して全員元気にクエゼリン島に到着した。連隊旗を先頭に、この部隊がクエゼリン桟橋に上陸した時、私達はその偉容に非常に心強く感じ、心から御苦労様といいながらこの部隊を迎えた。

その後陸海軍協同について常時連絡協議して、対米第一線のまもりに遺憾なきよう、一丸となつてこの重大な任務を果すよう努力した。この陸軍部隊はその後大本營の命令によつて、連隊長以下主力はクエゼリン島に、その他は大体大隊を基幹として、ミレ島、マロエラップ島、ウオツゼ島に分派されて、それぞれ同島の海軍部隊と協力した。

昭和十八年一月、陸軍築城本部長がマーシャル方面を視察して急速にこの方面の築城が問題となり、陸軍築城本部より北村陸軍少佐が第六根拠地隊司令部附として、クエゼリン島に着任し、マーシャル、ギルバート方面の主要島の築城を計画指導することとなつた。

同少佐は着任早々から各現地を巡回し、各島の状況を詳細調査した。築城した島は警備隊主力のいるウエーキ、ウオツゼ、マロエラップ、ミレ、ヤルト、クエゼリン、ルオット、マキン、タラワ、ナウル、オーシャンの十一カ所であつた。しかし残念ながら要望のセメントが半量も到着しなかつたので、計画通り実施できず重点的に一応完成することができた。ここで築城というのは、いはゆるトーチカ式の指揮所、通信所をつくることであるが、マーシャル方面のように低い島では、地下を掘るとすぐ海水がでてこの作業はまことに困難であつた。

南洋部隊の防衛作戰會議と玉碎戰準備

昭和十八年五月中旬であつた。トラック環礁内に碇泊する連合艦隊旗艦大和で、南洋部隊の各參謀が集り、各防備区域の強化について會議をしたことがあつた。

予定時刻となると、各防備部隊の參謀がおのおのの説明資料を携えて會議室に集合した。久し振りに會つて懐しさのあまり、楽しそうな談笑がつづき、お互いに今日無事であることを喜び合つた。そのうち古賀峯一長官が幕僚を従えて着席する。

この時はじめて山本五十六長官が戦死されたことを知つて、山本長官および随行した幕僚達の英靈に哀悼の意を捧げた。會議は連合艦隊首席參謀の黒島海軍大佐の戦況全般に関する説明によつてはじめられ、そのあと各地域ごとに代表者が防備の現状および要望事項について報告した。

最後に各地域の防備施設その他について真剣なる討議があつて、古賀長官の挨拶によつて本會議を終了した。ここで当時の古賀長官の情況判断はまことに悲壯なものであつて、その大要はつぎのようなものであつた。

「すでに日本海軍兵力は、対米半量以下に低下し、その上ラバウル陸上航空戦の実施の結果、海上航空決戦兵力の精銳を失い、かりにわが所望の全力激撃決戦ができたとしても、勝算はいちじるしく低下して三分もない。

ここにおいて、彼我兵力差をどうすることもできないので、海軍作戰に関する限り玉碎作戰をおこない、われ

斃るるもなお彼に大きな損害を与えて時を稼ぐ以外にない。結局は、他の正面の支作戦には顧みず、ひたすらマーシャル、ギルバートの線を邀撃線として、艦隊決戦を企図することである。

勝算はいちじるしく低減したがまだ絶無ではない。戦略的にも地理的にも我に有利なマーシャル線で、早期決戦をすることがよし玉砕戦に終つても最大の戦果を期待し得る唯一の戦法であると確信する」

その夜ささやかな夕食会があつて、私もその末席におつたが、本日の会議の全般からみて、マーシャル、ギルバート方面防備部隊に対する壮行会のようにあつたし、またこの夕食会は、われわれ代表者に対する送別会のようにあつた。

私は遠くマーシャル方面防備部隊を思い浮べ、この会議の状況をどのように伝達したらよいかいろいろと考えていた。絶対に負けないといえるような戦ならばいざ知らず、もちこたえるだけ時を稼いで最後の一兵となるまで戦うこの玉砕戦のなんと悲壮なものであろう。ありし日の大海軍を偲び、まことに感慨無量であつた。これこそ死生を超越した崇高な愛国心に徹する以外に何もものもないと思つた。

翌朝澄み切つた南海の空を一路クエゼリン島に飛んで、早速阿部司令官に会議の経過および連合艦隊長官の悲壮な情況判断を報告した。そしてこの情況判断に基いて、マーシャル方面の玉砕戦準備に関する具体的方策について協議した。そしてその方策が一応まとまると、各主要島を巡回して、各警備隊、艦船その他の玉砕戦準備につき懇談し、早急にこれが完成を要望した。

玉砕戦準備方策は大体つぎのようなものであつた。

一、戦斗指揮所の整備

二、防禦線（掩蔽壕）の整備

三、文書その他重要物件の整理保管

四、レールその他在島の鉄材を集め、槍その他の応急防禦兵器の製作

五、米穀その他主食品をドラム罐に入れ、地下に埋没保存

六、在島の動物および植物の調理法の研究

七、対空、地上防備兵器の整備

八、敵上陸に対する防備訓練

こうして、マーシャル方面の玉碎戦準備は前述会議以来着々と整備しておった。この頃の米側の動静について、米国のモリソン博士は太平洋戦争史でつぎのように述べている。

「昭和十八年五月二十日、連合国合同参謀本部が承認した方策は、西太平洋に拠点を求め、航空攻撃をもって日本を屈服させる。万一それだけで効果を収めることができない場合は、北上して日本本土に上陸することである。」

西太平洋に拠点を求めるには、まづマーシャル群島を占領せねばならない。このためには、準備行動としてギルバート諸島を占領して、同地からマーシャル方面の写真偵察をおこなう必要がある。」

昭和十八年十一月二十日、トラックにおける防衛作戦会議があつてから六カ月、米国攻略部隊がきはめて機密な行動の下に、ギルバート諸島のマキン、タロア両島に大挙来襲した。日本海軍守備隊は頑強にこれに抵抗して、相当の損害を敵に与えたが、同月二十三日ほとんど全員が玉碎して、ついに両島は米軍に占領されてしまつ

た。

この作戦中、第四艦隊長官は幕僚とともにクエゼリン島にあって前線指揮をした。私もこれに参加して、作戦指導に協力した。つきつぎに連絡される現地からの無電報告に切歯扼腕しながら、マキン、タロア両島守備隊の奮戦状況を見守っていたが、ついに天皇陛下万歳の無電を最後に現地との連絡が杜絶してしまった。

やがてクエゼリン島（タロア島より北方三五〇哩）も同じ運命となることをひそかに覚悟したのである。

私は十一月十五日附で艦政本部への転勤命令をうけていたのであるが、交代者が中々着任しなかった。いよいよ交代者が着任したので、事務引き継ぎをおこなっていたところギルバート方面の防衛戦がはじまった。こうなると交代はもろろんできなかつたので、この作戦が終了したあとやと事務引き継ぎを完了した。十一月三十日の朝、約一年八カ月間の住み馴れた懐しのクエゼリン島にいざさらばした。

タロア島がクエゼリン島の南方三五〇哩の近距離にあり、この島が米軍に占領されたことは、マーシャル方面にとつて、あたかも喉元に短刀をつきられている状況であった。というのは、タロア島の航空基地が急速に整備されているであらうし、敵航空機の来襲が今後はげしくなることが明白であったからである。私が輸送機でクエゼリン島を去る日も、すでに対空警戒を厳重にしていた時であり、果して私の出発が予定どおりできるかどうか心配されたほどであった。しかし幸運にも予定どおり出発し無事トラックに到着し、トラックよりサイパン、そしてサイパンより横浜へと空の旅を続けて帰宅した。



昭和十九年二月六日、クエゼリン島もマキン、タロア両島とほとんど同じように米軍に攻略されてしまった。この悲報を知った私には、マーシャル方面の思い出があたかも走馬灯のようにつぎつぎに偲ばれてきた。

とくにこれが最後のお別れであろうと心に秘めてクエゼリン島を去る時、あの栈橋で見送ってくれた隊員の悲痛な面影がなんともいえない感じであつたし、九五二空で司令と一晚中快談した時寂しく笑つた司令の最後の顔がまぼろしのように浮んできた。

そして大挙した米軍の進攻に最後の一兵となるまで勇戦奮斗したであろうあの防禦線、最後まで敢斗したであろう戦斗指揮所など、クエゼリン島の戦場がまのあたりに浮んできた。こうして私は一晚中眠れず床の間に向つて正座し、雄々しく散華した殉国の英霊に黙禱を捧げた。私の胸になにもかおし迫る靈感を感じながら。この日以来この思い出は私の脳裏に深く刻みこまれ、私の一生を通じ忘却できないものとなつてしまった。と同時に御遺族の悼ましい御心境を拝察して、微力ながらできる限りの御力添えをしたいと念願し、またこれが英霊に対し今日生きている私達に与えられた唯一の仕事であろうと痛感した。

いよいよ二十年祭を迎える。御遺族も新なる思いで、久し振りに御霊と靖国神社で再会されることであろうし、私達もまた当時の思い出を新にすることであろう。

クエゼリン島の防衛戦

松 平 永 芳

マーシャル方面の一般戦況

先にボーゲンビル島の無力化あり、又東部ニューギニア・ダンピールの失陥あり、所謂わが国防圏の前衛線は相次いで崩壊し、その東翼たるマーシャル群島の守備を担当する第六根拠地隊・第二十二及び第二十四両航空戦隊等の現地部隊は、戦力の強化促進（十二月五日の空襲によって失った七〇機に近い航空戦力の回復・十月下旬発令の陸軍海上機動旅団及び各南洋支隊の進出配備・各島に於ける邀撃陣地の構築等の強化促進）に昼夜を分たぬ努力を傾けつつあったが、目的達成意の如くならない実情下にあった。

しかのみならず、聯合艦隊司令部は、敵の主反攻は依然としてラバウル方面であるとの判断を下し、却って十九年一月には母艦航空兵力の最精鋭一〇〇機を南東方面に転用した為、混乱し切った動きの裡に同方面は一月三十日早朝の敵機動部隊による一斉攻撃を被る結果となった。

この時期に於ける同方面のわが兵力配置の状況は次表の通りであった。

方 面 兵 力 配 備 (昭和十九年一月二十九日現在)

第 四 艦 隊		南 西 方 面 艦 隊									
		第二十三航空戦隊					第七五三航空隊				
第六根拠地隊 (司令部 クエゼリン)		第二十二航空戦隊					第二二十四航空戦隊 (司令部ルオット)				
		第二五二航空隊					第二八一航空隊				
		第二五二航空隊					第五三二航空隊				
		第六十一警備隊					第七五二航空隊				
		第六十二					第六十一警備隊				
		第六十三					第六十二				
		第六十四					第六十三				
		第六十五					第六十四				
		第六十六					第六十五				
		第六十八					第六十六				
第九五二航空隊		水偵 四					クエゼリン環礁エビゼ島				
海上機動第一旅団の歩兵第二大隊 及工兵隊							クエゼリン				
南洋第一支隊の一部							クエゼリン				
海上機動第一旅団の歩兵一ヶ中隊							ウオツジエ				
南洋第一支隊の歩兵一ヶ中隊・機 銃一ヶ中隊							ウオツジエ				
							ルオット				
							タロア				
							ルオット				
							ルオット・タロア				
							クエゼリン・ルオット				
							ヤルト				
							ウオツジエ				
							マロエラツプ				
							ウニーキ(大島島)				
							ミレ				
							クサイ				

力 海 軍 兵 力

マ ー シ ャ ル			
海上機動第一旅団の歩兵一ヶ中隊		マロニラップ	陸 軍 兵
南洋第一支隊の歩兵一ヶ中隊			
南洋第一支隊・甲支隊の一部・山砲兵一ヶ大隊・工兵一ヶ中隊		ミレ	
南洋第一支隊の歩兵第二大隊		ヤルート	
海上機動第一旅団(第二大隊・工兵隊欠)		ブラウン	
南洋第二支隊			
甲支隊の一部		クサイ	

十九年一月三十日クエゼリン・ルオット・ウオツジェ等のわが航空基地を急襲した敵機動部隊は、ギルバート方面の基地航空部隊の支援を得て、更に翌三十一日及び翌々二月一日にも猛攻を加え続け来たつたのに反し、わが航空兵力は反撃の余裕さえもなく、殆んど全部が地上に於て撃破し尽された。結局わが方は、時期的予想、敵上陸の地点的予想共々裏切られ(マーシャル群島に進攻の場合には、ラタック列島、就中ミレ・タロア・ウオツジェ等の上陸を企図する公算が多いと予想していた)、二月一日朝来の猛艦砲射撃の掩護下に、クエゼリン・ルオット両島に進攻上陸の米兵を迎え立たなければならぬ立場に追い込まれた。

ルオット島には第二十四航空戦隊の司令部があり(司令官海軍少将山田道行)、総兵力約二、九〇〇名を算したが、大部分は航空部隊の要員で、地上戦斗力は第六十一警備隊の約四〇〇名に過ぎず、加うるに敵上陸前の猛砲爆撃によって既に大半の者が傷ついていたので、戦斗開始の翌二日には全員玉砕し、交戦は僅か二日を以て終

息した。

クエゼリン島の激戦

クエゼリン島には次表に示す陸海兵力が南北二地区を分担して守備していた。

総指揮官 第六根拠地隊司令官 秋山門造 秋山門造 令官海軍少将		北地区指揮官 第六十一警備隊司令官 令海軍大佐 山形政二		第六十一警備隊（二部ル オット） 第六通信隊 第六潜水艦基地隊		その他 第六根拠地隊司令部附属 陸戦隊・第一、第二防空 砲台員		第六根拠地隊司令部附属 陸戦隊・第一、第二防空 砲台員		海上機動第一旅団機動歩 兵第二大隊及び工兵隊		南洋第一支隊の一部兵力		約一、五〇〇名 約二、三二〇名		陸軍兵力 約一、二〇〇名		海軍兵力 約二、七〇〇名	
南地区指揮官 海上機動第一旅団 機動歩兵第二大隊 長陸軍大佐 阿蘇 太郎吉		第六根拠地隊司令部附属 陸戦隊・第一、第二防空 砲台員		第六通信隊 第六潜水艦基地隊		第六根拠地隊司令部附属 陸戦隊・第一、第二防空 砲台員		第六根拠地隊司令部附属 陸戦隊・第一、第二防空 砲台員		海上機動第一旅団機動歩 兵第二大隊及び工兵隊		南洋第一支隊の一部兵力		約一、五〇〇名 約二、三二〇名		陸軍兵力 約一、二〇〇名		海軍兵力 約二、七〇〇名	

第六根拠地隊司令官海軍少将秋山門造は、ギルバート作戦の戦訓に鑑み、敵の環礁内よりする上陸に備えて、礁内側の海岸に戦車壕・機銃陣地等を急速に構築し、敵邀撃態勢に万全を期していたので、善戦敢闘、よく五日

間に亘る敵の猛攻に耐え得たのであるが、この島は何分にも全真玉碎し、その詳細なる戦斗状況は殆んど不明である。

しかし僅かに残る作戦電報・戦況報告等を元にし、更に米軍公刊戦史の諸資料を加えて纏めた以下の戦斗記述によって、その動きの大要は理解し得るであろう。

一月三十日、クエゼリン本島に於ては、敵機動部隊の空襲を被るとともに、〇七〇〇頃から戦艦三隻・駆逐艦五隻による艦砲射撃を受け愈々その強行上陸企図が明白になったので、暗号書は一部を除いて全部焼却処分にした。而して一三三〇頃に至り、秋山総指揮官は、

敵ハ今夕ヨリ明未明ニ亘リ、湾内ニ侵入上陸ヲ企図スベキヲ以テ、海上部隊ハ全力之ヲ襲撃セヨとの命令を下した。

なお、エニブージ島の第六通信隊送信所は、同日の砲爆撃によって破壊され、辛うじてTM電信機を以て連絡を保つ程度にその能力を激減した。

翌三十一日（敵の所謂D日）〇四三〇敵は戦艦以下十七隻の艦艇及びLST等四十五隻の輸送船を以て環礁に接近し、エニブージ島（本島より約六哩離れた小島）を始めとし、エニロベガン、キーヨ、ニンニ・チャンス各小島に上陸直ちにこれを占拠し、水深の深く船舶の礁内侵入に便利なキーヨ水道（キーヨ島ニンニ島間の水路）を確保した。

それのみならずエニブージ島に対しては、アーノルド中将（GENERAL ARNOLD）麾下の野砲兵五ヶ大隊（一〇五耗榴弾砲装備の野砲兵第三十一・第四十八・第四十九・第五十七大隊及び一五五耗榴弾砲装備の野砲兵

第四百四十五大隊の計五ヶ大隊を揚陸し、クエゼリン島砲撃準備を完成した。

一方同日の猛砲爆撃によってクエゼリン島の砲台は殆んど破壊し尽され、人員の損害は所在員数の約五分の一に達した。又同日の被害状況に鑑み、艦艇部隊の乗員はすべて陸上に揚げられ、北地区守備隊に編入され、陸上戦斗に従事することに定められた。

なお、夕刻（一八二二）に於ける敵艦船の状況は、礁外視界内に戦艦五隻（米戦史によれば、それはミンツ・ペンシルヴァニア・ニューメキシコ・ミネアポリス・ニューオルレアン）の五戦艦である。巡洋艦五隻・駆逐艦十隻・輸送船十四隻が確認され、輸送船の一部はゲア水道を通過して礁内侵入に成功した。

明ければ二月一日、Dプラス一日目、即ち敵のクエゼリン島上陸敢行の日である。敵は同島西方洋上五、〇〇ヤード附近に攻撃出発線を定め、未明小型上陸用舟艇に移乗して発進準備を整えた。

やがて太陽が昇り、〇七四五に及ぶや、米軍は上陸海岸に対する戦艦群の露払い射撃を皮切りとし、エニブーシ島よりする野砲兵大隊の掩護射撃、艦載機による銃爆撃等全火力を以てする徹底的な攻撃を展開した後、頃はよしと〇九〇〇上陸発動を下令した。而して米舟艇の先陣第一波が上陸海岸に乗り上げたのは正に〇九三〇のことであった。ここに於て彼我の間には数日に亘る惨愴を極めた陣地攻防の白兵戦が開始された。

これより先、秋山総指揮官は、

味方ハ一兵トナルマテ陣地ヲ固守シ、増援部隊ノ来着マテ、本島ヲ死守スベシ

と全軍に命令し、自ら音羽参謀等幕僚を従えて陣頭指揮をしたが、同夜二〇〇頃前線視察に赴くべく出壕した際、飛来し来った敵弾を受けて戦死するに至った。

同夜陸軍を主力とする南地区守備部隊の全兵力は、夜襲を執行して一旦敵を水際附近に押し戻したが、艦砲による掩護射撃及びエニブージ島よりする砲兵の集中射撃に遭遇し、大損害を被って、攻撃は挫折、再び陣地に復した。

二月二日・三日・四日は、引き続き北方へと圧迫されつつも、全軍敢闘、熾烈なる陣地攻防戦を展開したが、陸軍大佐阿蘇太郎吉は、四日一〇〇〇首脳部自刃の後、自ら守兵をひっさげて正面の敵中に躍り込み、美事な最期を遂げた。かくて翌々六日には全島完全に敵の占領する所となった。従つてその後、海軍当局に於ては玉碎諸勇士の戦死確定の日を二月六日と定めた。

なお、クエゼリン本島北方六裡にエビゼ島あり、ここには第九五二海軍航空隊及び第四施設部クエゼリン支部の一部人員計八百名程が駐屯配備されていたが、三日〇九三〇敵上陸軍を迎え、善戦するも及ばず、全員玉碎した。

以上がクエゼリン島を中心とする戦斗の実況であるが、わが将兵が如何に善戦敢闘したか明らかである。

最近のクェゼリン島

長谷川 敏

旧内南洋諸島の現状

一、太平洋信託統治地域

日本の委任統治領であった旧内南洋諸島は、戦後、米海軍の軍政を経て、昭和二十二年四月、戦略信託統治地域として、米国を施政者とする信託統治協定が国連安保理事会で承認され、同七月発効した。そして、太平洋信託統治地域と呼ばれ、米国が行政、立法、司法の全権を持っており、この地域への入域許可の審査はきびしい。ところで、この広い、しかし、殆んどが海の地域に人口は七万程度といわれているが、目下、この島の人達は文明的な国づくり人づくりに懸命である。

島の人達の仕事は、椰子の実から石鹼の原料となるコブラを採ることである。一ポンド四セント(約十四円)位だそうである。三十歳以上の中年層の人達は、未だに日本語を覚えていて、上手に話しかけてくる。片仮名や漢字を書ける人も少くはない。日本のことを「内地」と呼び、日本製の品物、特にタバコ、ポマードなどは米国製

のものよりも非常に好評である。中には「ホマレカキンシはあるか？」と来る人もいる。大きな島には店があるが、日本製の衣類や罐詰などが棚に並んでいる。

又、どんな小さな島でも、小学校と教会があり、先生も牧師も島の人である。中学校、高等学校は、南洋支庁のある島に設けられており、更に成績優秀者には奨学制度があつて、グアム島やハワイの大学に派遣される。次にこれからの各群島の最近の模様を少しく記してみよう。

二、マリアナ群島

ここは火山によつて出来た群島で、山あり谷ありの景色のよいところである。島の人達も文化的だ。太平洋信託統治政府（南洋庁）が昭和三十七年七月、グアム島より、このサイパン島に一時、移つて来ている。マリアナ支庁もサイパンにあるが、ロタ準支庁の次長にはマングロナ氏という島の人になっている。

三、マーシャル群島

ここはサンゴ礁で出来た島々からなつてゐる。従つて椰子やマングローブの木でこんもり茂つていても、島自体は海拔僅か数米という低く平坦で細長いものである。大きな暴風雨に会つと、島の殆んどが水をかぶつてしまふことがある。こういうことは百年に二、三回位あるという。日本時代南洋支庁のあつたヤルトも数年前、暴風雨に見舞われ、数人の死者が出たという。

戦後、南洋支庁はマジエロ島に移つた。ここには中学校、放送局、映画館、玉突場などがある。毎年夏頃に、

マーシャルの全環礁中から、二、三名づつの代表がこの島に集まり、マーシャルの繁栄のために諸問題を協議し合う。マーシャルの新しい指導者、トワイト・ハイネ氏は、ミクロネシア議会議長の要職にあり、又、マジエロ中学校の校長先生でもある。彼は島の人で、人々からツー・アイという愛称で呼ばれ、マーシャル中の信望を集めている。米国の原水爆実験がビキニとエニウエトック環礁で行われた時には、米国に渡り、マーシャルの大酋長、カプア氏等と共に、敢重に抗議と補償を申し入れたという。

四、カロリン群島

東カロリンは大体マーシャル同様、サンゴ環礁で出来ているが、西カロリンは大様マリアナと同じ、火山によって出来ている。支庁は日本時代と同じで、ポナペ、トラック、ヤップ、パラオに各々ある。パラオは日本時代に南洋庁があったためか、とても親日的であり、パラオ支庁の次長には、今、日系の矢野竹雄氏がなっている。夜、沖縄の日本語放送がよく入るので、この人は新しい日本の流行歌など、かなり知っている。又、パラオ放送局でも、日本の戦前、戦後の流行歌のレコードを屢々流している（トラック島にも放送局がある）。ここにはハワイ銀行の出張所も出来た。

ヤップ地区は、保守的で、ヤップ、ウルシー、ヌグール等々の島々は、未だにフンドシ、腰ミノ姿である。しかし若い人達には着衣している人もかなりおり、この習慣が消えるのは時間の問題であろう。フンドシ或は腰ミノで、オートバイ（日本製のが多い）にまたがって飛行場の滑走路を走り廻ったり、或は日本の雑誌を読んで笑ったりしている風景はちょっと面白い。

最近のクエゼリン環礁

一、米軍の基地

クエゼリン環礁はマーシャルの全環礁中、最大のものである。その本島、クエゼリン島は、御承知のように今は米軍の基地となっている。まず、船からでも飛行機からでも、この島に近づいて、真先に眼に入るものは、島の中程にある円形に組まれた巨大な金属製の囲いと、その隣りにある、これ又大きな、白い半球状の建造物であろう。そして、島の西端にはナイキ・ジュースの発射場がある。ところで、これらのことについては、朝日新聞ですでに掲載しているのです、その一部を記してみよう。

ナイキ・ジュースとは飛んで来る大陸間弾道弾を打ち落とす対ミサイル用ミサイルの一つで、一番開発が進んでいる。そして前述の金属製の囲いの中央部には、レーダー送信所があり、その屋上にある大きな三角形のアンテナは野球場の内野ほどもあるという。これが一分間に十回、ゆっくり回って、降下してくるミサイルの弾頭をスクリーンに捕える訳である。又、送信所を囲んでいる金属製の塀の高さは二十米以上もあるという。これは強力な送信機が発生する電磁波から、人や施設を保護するためだそうだ。白くて半球形のものもやはりレーダーであろう。時折り、カリフォルニアのバンデンバーグ基地から、アトラス弾道弾を発射、ここのナイキ・ジュースで捕捉、撃墜の練習をしているという。

さて、クエゼリン島には、これらを中心とし、これに附随する物が設置されている。しかし、ここに働く米国人達は家族を伴って来ているので、殺ばつとした雰囲気は感じられない。アワー・グラスという日刊新聞を発刊し、日中はプールで泳ぎ、夕方涼しくなる頃には女子チームがソフト・ボールに興じ、そして暗くなるとあちこちで映画会が始まる。こういう時には、この島が基地であるという実感から一層離れてしまう。

この本島には島民は住んでいず、同じ環礁中の近くの幾つかの島に、まとまり住んでいる。そして、身分証明書を示して本島に毎日仕事しに通う。男は労務に、女は家政婦として、この労務者達は英語より日本語がうまいから、彼等の監督には、同じ米国人でも、日系の二世達が担当している。こういう基地で日本語が仕事に使われているというのは、ちょっと奇異の感がするが、彼等は前述のように日本語が大変上手であってみれば、不思議とするに当たらない。二世よりも上手にしゃべり、且つ字を書く人も少くないらしい。

日本語といえば、クイハイルベカ・ラスクと書かれた札が、ミサイルの発射場附近一帯を囲んだ金網の各所につけられている。勿論クハイルベカラズクの意で、基地の管理者が多分、島の人の誰かに下書きさせたのを、そのまま写して方々に掲示したのであろう。それにしても、この札には、英語とマーシャル語でも立入禁止と書かれているので、日本語の方は一体誰に読ませるのかなと思わせる。

二、戦火の跡

クエゼリン本島はすっかり整理されてしまつて、ふた昔し前の激戦を思い出させる物は殆んど残されていないといつてよからう。

まず、飛行場の待合室の片隅には、マーシャル全環礁の地図と、各環礁で行われた戦いの日付とが出ている。そして、側には、復写したらしく少々ぼけた十枚位の戦争の写真も貼りつけてある。これによるとクエゼリン環礁は一九四四年一月二十九日、マーシャル群島中で最初に戦闘が行われ、五、六日間で終わっている。

この待合室から舗装され、今はすっかりきれいになっている通りに出ると、直ぐにクエゼリン環礁の上陸、……と英文で刻まれた碑が建っている。また、待合室から海岸近くの小高くなった芝生の上には十字架と真白く塗られた大きな木が置かれている。ここが米國将兵の墓地であろう。

ここからずっと西の方、ミサイルの発射場の方に日本人墓地がある。そこは例のクイハイルベカ・ラスクの金網の直ぐ外側だ。墓地になっている十米弱四方の周囲には、低い白い柵が廻らされ、その入口には米軍が作ったらしい真赤な鳥居が建っている。この柵の内側のあちこちには、南洋諸島にはない浜木綿が、その白い花を咲かせ、また柵の横にはタコの木があって、その葉は墓地内に影を落としている。南洋の日向は暑いが、陰に入るととても涼しい。この下に眠る英霊は、さぞかし、しのぎ易いことであろう。クエゼリン島は影がとても少い。他の環礁はもちろん、クエゼリン環礁でも他の島々には、椰子やマンダローブの木が全体を蔽っていて濃緑をしているのに、この島だけは強い南洋の太陽で島中がキラキラと反射しているようだ。本島でかつての激戦を想起させるものは、いまは以上の位であろう。

クエゼリン環礁中の他の小さな島に行くと、未だに彼我の兵器の残骸が幾らか残っている。砂浜にえんこしている米軍の戦車らしいもの、船首だけを海水の上に出している、どちらのだか判らない船、米軍が使ったらしい鉄製の橋、カニの遊び場となっているトーチカ、半分砂に埋った機関銃、船からはずれたスクリーナーなどが、或

は錆びてくさり、或はひん曲って、今まで行われたであろう一応の整理に反抗するかのようには、未だに波に洗われながらどつかと腰を下している。

(完)

クエゼリン島戦没者遺族会

(連絡先)

東京都世田谷区野沢町二の一四〇

常任幹事 浮田信家

電話東京(42)三六一四

(印刷所)

東京都中央区日本橋茅場町一の二

保好舎印刷株式会社

電話東京(67)0261・0262

